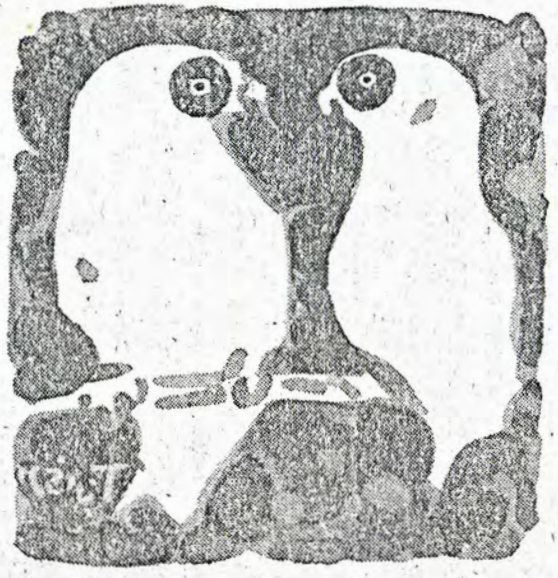
彭述之夫妻のこと

中嶋嶺雄（東京外国語大学助教授）
高松健太郎画

中国の対外向け宣伝雑誌『中国画報』の発行が「都合により」大幅に遅れる旨を知ったとき、その理由は、いわゆる「四人帯」打倒の北京政変のためだとは思ったが、まさか「毛沢東主席追悼特集」のその号の葬儀の写真から、壇上中央に並んでいた王洪文、張春橋、江青、姚文元の四人の姿を消去し、こうして追悼大会（葬儀）の写真を完全に修整するためだとまでは考えなかった。毛沢東葬儀の模様は中国国内でもテレビ中継されたし、国外にも電波が流されて、誰の脳裏にもそのときの光景が残っているのに、あえて、こうも徹底した措置をとるところに、古来、中国政治



の酷烈さがある。だが、これこそ、事実の改竄であり、抹殺であって、「実事求是」の毛沢東の教えにも悖るというものだろう。こうした現実を見ると、いまから十年以上もまえ（一九六六年七月）、毛沢東が揚子江を遊泳したとして宣伝された写真が、どうしても合成写真であるように私には感じられた記憶が逆説的に正しかったのかもしれない。いずれにせよ、今日の中国では、こうして歴史の真実がしばしば造り替えられる。

このような歴史の偽造をはやくから告発してきた人物の一人に彭述之がいる。とくに、大抵の毛沢東伝記が事実の記述を避けて空白にしている一九二〇年代前半の毛沢東の「右寄り」の時期について、多くの事実が隠されていると、彭述之は一貫して主張してきた。たしかに、毛沢東は、中国共産党内でよりも国共合作へと向った国民党内部で人気を博すにいたった直前の一九二三年には、当時の中国共産党機関誌『嚮導』週報に「北京政変と商人」などの三論文を書き、中国革命の主要勢力は商人つまりブルジョアジーであるべきだ、などと主張していたのである。これらの論文がいま中国国内で読まれる機会でもあれば、「毛沢東思想」の評価にも大きな修正が加えられねばならないと同時に毛沢東の全体像はよりリアルに浮き彫りされるはずであるが、もとより、そのようなことはまだ絶対にタブーである。

彭述之といっても、いまや知る人は少ないけれども、中国共産党史にはしばしば登場する中国共産党初期の重要なリーダーの一人であった。とくに一九二五年一月から上海クーデター直後の二七年五月まで、彼は党中央政治局常務委員であるとともに党中央宣伝部長兼『嚮導』週報の編集長という要職にあった。当時の『嚮導』週報を繙いてみると、最高指導者・陳独秀のほか彭述之、張国燾、瞿秋白、蔡和森といった初期中国共産党のキラ星のようなリーダーたちが毎週のように健筆をふるっており、毛沢東はまだほとんど顔を出していない。毛沢東の有名な論文「湖南農民運動の視察報告」はその前半のみが『嚮導』週報に発表されたが、後半部分が掲載されなかったのは編集長・彭述之の判断によるものであったといわれ、のちに中国共産党の官許正統史家・胡華は、有名な『中国新民主主義革命史』のなかで、「当時、中国共産党宣伝部長であった日和見主義者・彭述之は、これをつづけて掲載することを許さなかった」と非難している。

彭述之は、上海クーデターののち、極左路線に転じた党中央を離れ、二九年春にトロツキーの中国革命にかんする

論文を密かに読んで強く感銘し、二九年には陳独秀とともに「トロツキスト」として党を除名されるにいたった。やがて、中国トロツキズム運動の創始者となったが、蔣介石の弾圧と毛沢東主義者の圧迫のなかできわめて困難な道をたどり、一九四八年末には香港へ逃れ、さらにサイゴンを経て五〇年春にヨーロッパへ亡命、いわゆる第四インターナショナルの再建につとめたのである。

このような彭述之のユニークな経歴についてはその数奇の運命とともに漠然と知ってはいたが、こうした経歴が予想させるイメージとは逆に、五・四運動期の北京大学学生であった知識人としての品位と風貌をそなえているのが彭述之氏の実像である。その彭述之は一八九五年の湖南省邵陽の生まれ、毛沢東より二歳年少だが、いまも亡命生活を送りながら健在である。その妻・陳碧蘭女史も、五・四運動に活躍した有名な婦人運動家であったが、やはり健在である。

私が彭述之夫妻に初めて会ったのは、一九六八年秋であった。いまなら、もう明らかにしてもよいと思うが、当時、パリで亡命生活を過しながら毛沢東主義者との論戦に精を出していた彭述之夫妻は、《ゼンガクレン》で知られた日本の新左翼運動の実態を知る目的もあって、密かに来日し、二カ月ばかり日本に滞在したことがある。この旅行は、ドゴール政府が親中国政策をとっていた時期だけに、反毛沢東主義の亡命者にとってはきわめてリスクの多い冒険的な試みであったのだが、日本の新左翼や自称トロツキストたちは、まともな理論武装もしていないばかりか、中国革命についても、ロシア革命についてもほとんど認識がなく、内ゲバばかりをくりかえしていることを知って彭述之氏は大変驚き、失望したのであった。ましてや彭述之その人の名前さえ知らないので、日本ではいささか不愍な状態にあったといえよう。そのとき英文学者でI・ドイッチャー『トロツキー伝』三部作の訳者でもある山西英一氏から私は彭述之夫妻の来日を知らされ、私が中国研究者としての立場からいささかお世話をすることとなった。

初めて会ったときの光景が目に浮ぶが、六本木の裏街のある家の二階に密かに仮寓していた彭述之氏に電話し、指定された時刻にその裏街を歩いてゆくと、ステッキを手にした品のいい小柄な眼鏡の老紳士に出会うことができた。その老紳士こそかつては毛沢東の論文さえ掲載を拒否し、一世を風靡した有名な論文「誰が中国国民革命の領導者か」を『新青年』誌上に書いた彭述之氏であった。近くのレストランで食事をしたのだが、亡命者の旅行であるので毎朝のパンを買いに行くことにも不自由だとのこと、私は、彭述之夫妻の短い滞日中、来日していることをふせて

『中央公論』誌上でインタビューをしたり、アジア調査会で夫妻を囲む研究会を開いたり、またTBS地下の「ざくろ」に御案内して松阪肉のオイル焼を大層喜んでもらったりしたのであった。

このとき、彭述之氏は、彼の著作集の日本での出版について、私に一切をまかせてくれる約束をされた。まもなく私は大学紛争の渦中に身を置くこととなり、次いで、香港へ一年半留学することとなって、著作集の仕事はすぐに果たせなくなった。

ところが、香港はやはり中国人社会だけあって、彭述之氏の古い同志や彼に私淑している人たちがいまもいるのである。香港という都市の複雑で底深い断面を垣間見た思いであった。

私は香港に留学中の一九七〇年夏、モスクワで開かれた国際歴史学会の帰途、パリに立ち寄る機会があった。教えられたアドレスには電話が記されていない。セーヌ川に近く労働者住宅の多いパリ郊外の彭述之氏のアパートをバスを乗り継いでようやく尋ね当て、偽名の表札のドアをノックすると、注意深い応答があって、夫人の陳碧蘭女史が大喜びで迎えいれてくれた。そのときの彭述之氏は、まるで突然帰省した息子を迎える父親のように、喜びにいささかあわてている様子で、まさにやさしい好々爺そのものであった。この性格では、あの烈しい中国共産党内の党内闘争に敗北するのは当然なのかもしれない、と思ったものである。このときの香片茶と夫人手づくりの炒飯の味が格別であった。

このときには会えなかったが、彭述之夫妻の一人娘の英湘さんの御亭主がフランス人の中国研究者クロード・カダール氏であり、このいかにも知的な好奇心の強いインテリ夫妻は、私が香港に留学中、船でアジア漫遊旅行にやってきた。インドのゴア、マレーシアのマラッカなどを経て香港へやってきたカダール夫妻のために、短期滞留者用のフラットを探してあげたりしたが、やがて私の留守中の日本へ行くことになったので、私のゼミの教え子のH君やK君を紹介し、私の留守宅などで大いに交流を深めた模様である。

私が帰国後、彭述之氏から届いた手紙で、香港で知りあった彭述之氏の弟子、陳さんが肝臓ガンであることを知らされた。陳さんは香港の中学教師であり、節約してためたお金で近く訪欧して是非一度、まだ見ぬ恩師・彭述之に会いたいと語っていたばかりであった。彼と親しくなってからは自分が客家(ハッカ)出身であることを打ちあけてくれ、むしろ客家料理屋の梅江飯店などでは生臭い客家料理を自慢していたのに、しかも育ち盛りの男の子が三人もいるのに、私

は彼が重症のガンであることを知らされたのである。彭述之氏からは、彼をもし救えるものなら日本の病院へ移して二度目の手術をしてもらえないかとのことであった。私は、香港から彼の症状にかんする情報を届けてもらい、築地のがんセンターの権威ある先生に面会して詳細に伺ったが、もう手遅れであろうとのことであった。陳氏が死んだという知らせを受けたのは、それから一カ月もたたないうちであった。

彭述之の著作集を出版したいと申し出ていた出版社が、著作集出版の約束をキャンセルしたいといってきたのは、ちょうどその頃、日中国交回復前後のいわゆる中国ブームのときであった。もとより、彭述之の著作集を出すことのリスクを避けるためであり、その出版社の社長は、近く、ある政治団体に混って訪中するとのことであった。こうした事情についての説明も兼ね、著作集の出版が遅れたことをお詫びするためにパリでの国際会議の折、私が二度目に彭述之氏宅を訪れたのは一九七三年の初夏であった。このときは娘さんの英湘さんと一緒だったが、帰途、老夫妻はバス　まで見送ってくれて別れを惜しんでくれた。

昨年の五月、ウィーンでの国際シンポジウムに出席したあと私はパリに一泊したが、夜中にホテルに着いてからカダール夫妻の新しい住所をサン・ジェルマン・デ・プレのすぐ近くに探し当て、天安門事件やフランスの毛沢東主義者の最近の窮状について、サルトル＝ボーヴォワール夫妻やジャン・リック・ゴダールらの毛沢東評価などについて夜更けまで楽しく語りあった。このとき、彭述之夫妻は、健康のためにアメリカの保養地へ移住していることを知った。日本での著作集出版のメドもつき、近く翻訳を仕上げるつもりでいる旨を伝えたら、日本での出版を心待ちにしているとの手紙がアメリカから届いた。こうした事情の一端を最近来日したソ連科学アカデミーの旧知の中国学者に話したら、彼も彭述之夫妻の誠実な人柄と娘さんのことを少し聞き知っており、日本のような自由な社会で彼の著作集が出るのは大いに意義があると賛同してくれた。

おそらく彭述之著作集は他所ではなかなか出にくいであろうし、それだけにできるだけ完全なものにしようと思っているが、『失われた革命を求めて――彭述之著作集』というタイトルだけははやくから決っているのに、なかなか仕事がはかどらない。

彭述之氏もすでに八十一歳。周恩来、朱徳、毛沢東亡き今日、いまはカナダに亡命している中国革命のもう一人の元老・張国燾氏とともに数少ない歴史の証言者であるので、是非、この秋には著作集を出さねばならないと思っている。

（了）

山藤章二